審査総評

審査委員長
蒲生 良隆

今回の学生賞は7大学11学科からの出展であった。概略内訳は川や水辺に防災機能や再開発、環境改善等を盛り込んだ7作品、地域再生5作品、コミュニティー公共建築3作品、その他3作品の合計18作品でどれも個性溢れる作品が集まった。プレゼン5分、質疑3分にての一次審査通過は昨年より1作品多い9作品通過し、2次審査で4作品に絞られ、三次審査では2得票差にて霞ケ浦の汽水化を計画した箕輪羽月さんの**「侯」**が最優秀賞受賞し、また今年から千葉県知事賞も合わせて送られた。昨年までは重複受賞が余り無かったが「なの花会賞」、新設の特別審査員賞も「侯」が受賞となり、ダントツに見える結果となった。今までにない新しい分野の建築ということが評価できる良い作品であった。

優秀賞の**「街庭、この街の地図を描き始める」**は木造密集地域の敷地境界を取り除くように個人の敷地を街の共有スペースとして開いていく計画で新たな視点からの提案となっている。

もう一つは首都高速を断片的に保存し日本橋の水辺継承を提案した**「Tokyo Residue」**である。単に除却ではなく一部を保存し、そこにあった歴史を記憶と形として残し象徴的に利用する建築であった。

これらの入賞作品は単に新築提案ではなく、設計者が問題解決すべく考案した独創的なもので、土木や都市計画、歴史保存の要素もあり審査員がそれぞれの評価軸をどこに置いたかで大きく異なる結果となった。選に漏れた作品にも問題意識、地域性を考慮した設計力の高いものもあったが独創性という点で及ばなかった。審査員も評価基準をどう判断するか難しい時代になってきたように思う。

市民からの投票により決まる市民賞は193票いただき模型に迫力のあった**「眠らない区役所」**が選ばれた。高校生の部は**「生活の中に溶け込む公民館」**が他の作品を大きく引き離しての受賞となった。いずれも市民目線で見やすい建築で親近感が湧く作品だったためと想像する。

2024.3.9 公開審査の様子